

小口切りのアサツキが、 いい香りです

広島市の桜の開花宣言は、3月22日。28日に満開になるまでの間、今年一度も雨が降らず、その後もずっと晴れの日が続いています。遅ればせながら、畑では30日に畑のソメイヨシノが開花宣言。近くの山のあちこちに、タムシバの白い花が見えるようになりました。

昨年秋に種球を植え付け、春になって新しい葉が伸びてきたアサツキが、いい香りです。その日一番のごちそうは、お豆腐の上のつけた小口切りのアサツキの香り！ 私には、素麺が食べたくなる香りです。

ワケギと同じようにして食べるエシャロットの葉も、菜の花も、この季節だけの「おいしい！」です。

「きゃ～、 ヤサイゾウムシ！」

毎年春になると、ハウスの中のどこからともなくわいてくる(?)アブラムシ。今年は、アブラムシを見つけたらすぐ、デンブン液をかけてみました。そのおかげでしょうか、いつもよりハウスの中の葉物野菜についているアブラムシは、少ないように思います。

…と、思っていたら、畑の野菜で自炊生活3年目に入る長男君から届いたのは、な、なんと、水菜サラダの中にいたというヤサイゾウムシの幼虫の写真！ Tonchanと顔を見合わせて、思わず「あら、あら…」と笑ってしまいましたとさ…。

〈4月の野菜〉

- 露地の畑では、菜の花やアサツキ、エシャロットの葉などが収穫中。中旬頃からは、ニラ、タラの芽、ワラビなどが採れ始める予定です。
- ハウスの中では、大根間引き菜、葉タマネギ、ハウレン草、わさび菜、リアスからし菜などが収穫中。ラディッシュやロケット、カブ菜、人参間引き菜などの収穫が始まる予定です。

ハウスの中の野菜には、アブラムシやヤサイゾウムシの幼虫などがついてることがあります。葉の裏や根元など、よく洗ってください。

！大切なお願い！

～郵便局からの振込用紙の「通信欄」への記入について～

- 野菜セットのお届け日の変更・お休みなどは、電話、FAX、メールでご連絡くださいますようお願いいたします。
- 確認が遅れることがありますので、郵便局からの振込用紙の「通信欄」には、ご記入にならないようお願いいたします。

〈スナックエンドウ！〉

冬を越し、葉が大きくなってきました。グリーンピースも順調です。空豆は、冬越しに失敗。冬の寒さで枯れてしまったものが多いです。

〈ズッキーニ！〉

芽が出ました。ペーパーポットの対角線上に種を立てて一粒まき。種皮がとれやすく、子葉の展開する方向がきれいにそろいます。

〈サトイモ！〉

ハウスの中で芽出しをしたサトイモです。ハウスの中に仮植えをしました。小さな葉っぱが出てきたら、5月頃、露地の畑に定植します。唯一、イノシシに食べられないイモなので、今年はたくさん作ります！

小さくて一匹一匹は弱いけれど厄介な虫

“アブラムシ”

アブラムシはカメムシ目アブラムシ上科に属する、体長2~4mmの昆虫で、アリマキとも呼ばれます。「アブラムシ」というのは総称で、多くの野菜につくモモアカアブラムシ、ウリ科やナス科野菜につくワタアブラムシ、ネギ類につくネギアブラムシなど、世界に4700種類、日本にも700種類いるといわれています。

アブラムシは、植物の上でほとんど移動せず、集団で維管束に口針を突き刺して師管液を吸って生活する、小型で弱々しい昆虫ですが、全世界の農家の敵として君臨している、とても厄介な害虫です。世界的に深刻な経済被害をもたらす作物の病気の上位3つは、全てアブラムシの媒介によってもたらされるウイルスが原因と言われています。

アブラムシの形態

アブラムシは、同種でもライフサイクルのステージによって、別種のように異なる形態を持ちますが、大きく分けて、翅のあるタイプを有翅型、翅のないタイプを無翅型といいます。有翅型は植物から植物に飛んで新たな繁殖地に移動することができます。ただし、飛行能力は低く、風に乗りながら弱々しく飛翔します。無翅型は翅がない分、生育するスピードが早く、ひたすら幼虫を産み続けてコロニーを形成するのに適しています。

また、同じ有翅型・無翅型でも単性世代や有性世代があり、見た目も異なります。

アブラムシの体色は種類によって様々ですが、同種であっても色彩変異が見られ、農業害虫として知られるモモアカアブラムシでは特に顕著で、大きく緑色系と赤色系に分かれます。



いろいろな色のモモアカアブラムシ



有翅型と無翅型

アブラムシがあつという間に増えるのは

アブラムシは、普通、卵で越冬します。春になって孵化した幼虫は全て雌で、幹母と呼ばれます。春から夏にかけて幹母やその後の世代の雌は卵胎生単為生殖により、自分と全く同じ、しかも既に胎内に子を宿している雌を産みます。いわばロシアの玩具で有名な「マトリョーシカ」のような「入れ子」状態になっているのです。これにより短期間で爆発的にその数を増やし、宿主上に大きなコロニーを形成します。

晩秋になってはじめてオスと卵を産むメスが現れ、交尾し有性生殖を行い、卵を産みます。しかし同じ種でも、気候条件などにより、有性生殖を行わず、一年中、メスだけでクローンを産み続ける系統もあります。



産子中のアブラムシ。
この時点で幼虫の体内には孫に当たる幼虫が既に入っています。

アブラムシは何を食べているのか

アブラムシの餌は植物の師管液です。基本的に、種ごとに餌とする植物が決まっていますが、少数ながら世代によって餌とする植物を変える(寄主転換)種があり、移住性アブラムシと呼んでいます。

アリとの関係

アブラムシは角状管から出す甘露をアリに提供する代わりに、天敵であるテントウムシ(成虫・幼虫)やヒラタブの幼虫をアリに追い払ってもらうことで共生関係にあると言えます。特にクチナガオオアブラムシの仲間はアリが作った蟻道の中で生活しており、アリがアブラムシを飼育しているといつてよいほどの関係にあります。



アリが群れるアブラムシのコロニー。
アリはアブラムシから甘露を貰う為に天敵を追い払う。

細菌との共生

アブラムシは、脂肪体という組織の中に数十個ほどある菌細胞という大きな細胞の中に、ブフネラという大腸菌近縁の細菌を住まわせています。アブラムシの唯一の栄養源である植物師管液には、ショ糖が多く含まれるものの、アブラムシが合成できない必須アミノ酸はほとんど含まれていません。ブフネラは、その必須アミノ酸を生産し、アブラムシに供給しています。一方、ブフネラは、自ら合成できないリン脂質をアブラムシから得ており、アブラムシの体内でなくては生存できません。

この共生関係は、およそ2億年前から続いていると推測されていて、未だに謎が多く今でも盛んに研究されているテーマのようです。